しおさい

太平洋を望む岩場で子育てをするオオセグロカモメ

CONTENTS

●広報誌『しおさい』20回記念号の発刊にあたり：東通原子力発電所長　鴇田真孝 ････2
●写真で見る地域の皆さまとのふれあい活動 ････････････････････････････････3
●20回記念号特集：東通村のランドマークタワー「尻屋埼灯台」にのぼってみよう！････4
●『しおさい』表紙で感じる 東通村の魅力 ････････････････････････････････6
●読者からの声 ･･8

記念号
vol.20
令和元年度発行
東北電力（株）東通原子力発電所

東北電力株式会社
執行役員
東通原子力発電所長　鴇田真孝（ときた まさたか）

広報誌『しおさい』20回記念号の発刊にあたり

広報誌『しおさい』は、おかげさまで、節目の第20号を迎えることとなりました。2006年の創刊以来、これまで発行を継続できましたのも、皆さまからの温かい励ましと貴重なご意見の賜物であると深く感謝しております。

さて、今回の記念号では、昨年から内部の一般公開が始まり、観光地としてますます関心が集まる「尻屋埼灯台」について、その歴史や構造を特集で紹介します。東通村が誇る尻屋埼灯台が持つ歴史的・文化的価値を再認識するとともに、皆さまと共有したいと思います。

また、もう一つの特集「表紙で感じる東通村の魅力」では、やわらかい水彩タッチで描く本誌の表紙絵を、モチーフとなった写真とともに振り返りながら、普段何気なく接している郷土の風景や風物詩の素晴らしさを皆さまと共感したいと思います。

これからも皆さまに親しまれ、楽しんでいただける広報誌を目指して紙面づくりに努めてまいります。引き続きのご愛読をよろしくお願いいたします。

地域とともに ～そして これからも～

発電所の誘致以来、半世紀以上にわたり、地域の皆さまとともに歩んでまいりました。青森県初の原子力発電所として2005年に営業運転を開始し、その後順調に発電を続けておりましたが、2011年の第4回定期検査以降、発電を停止した状態が長く続いております。

当発電所の運転再開が遅れていることにより、各方面に影響を及ぼしていることを重く受け止め、現在は、一日も早い再稼働を目指して、国の原子力規制委員会による新規制基準適合性審査への対応と安全対策工事に全力で取り組んでいるところです。

一方で、経営理念である「地域社会との共栄」、コーポレートスローガンの「より、そう、ちから。」のもと、地域に寄り添い、お客さまの期待により沿えるよう、地域の環境保全活動やイベント・スポーツ行事への参加、地域の未来を担う子どもたちの教育支援など、さまざまな活動に取り組んでまいりました。

これからも地域への感謝の心と地域社会の信頼に応えるため、所員一人ひとりが、地域のために今できることは何かを考え、実行してまいります。所員一同、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

～ 写真で見る地域の皆さまとのふれあい活動 ～

地域の環境保全活動やイベント・スポーツ行事への参加

①

②-1

②-2

⑩

⑥-1

③

⑨-2

④

⑧-1

⑨-1

⑤

⑧-2

⑦

⑥-2

① 下北ジオパーク清掃活動（北部海岸ジオサイト）　②-1、②-2 東通村ゲートボール大会　③ 国道338号線清掃活動
④ 下北ジオパーク清掃活動（猿ヶ森砂丘ジオサイト）　⑤ 東通村植樹祭　⑥-1、⑥-2 尻屋埼灯台周辺清掃活動
⑦ 来さまい宵祭　⑧-1、⑧-2 よさこい下北　⑨-1、⑨-2 東通村産業まつり　⑩ 東通村歩くスキーのつどい

地域の未来を担う子どもたちの教育支援活動

スクールコンサート&吹奏楽クリニック（東通小学校）

図書・教材の寄贈（東通小学校・東通中学校）

環境・エネルギー教室（東通中学校）

より、そう、ちから。東北電力

20回記念号 特　集

東通村のランドマークタワー「尻屋埼灯台」にのぼってみよう!

本州最北東端、大自然と寒立馬の美しい風景が観光客を魅了する、尻屋崎。その象徴ともいえる「尻屋埼灯台」に、皆さんはのぼったことがありますか?実はこの灯台、煉瓦造りとしては日本一の高さを誇り、東北初の洋式灯台として点灯した灯台です。今年の4月からは、外壁の塗装や扉の補修など、約20年ぶりという大規模改修が行われています。今回は、工事終了後の7月から一般公開される「尻屋埼灯台」を訪ねてみました。

煉瓦造り日本一の高さ!

津軽海峡と太平洋の海流が交差する東通村の尻屋崎沖は、古くから豊かな漁場として知られていました。しかし、潮流が複雑で濃霧も発生し、海面下には岩礁が広がっていることから、海の難所と呼ばれていました。

時を経て明治維新後、下北半島を治め開拓に情熱を注いでいた斗南藩は、尻屋崎への灯台設置こそが下北の産業発展と航海の安全に必要と考え、明治政府に要望書を提出。1871年(明治4年)に設置が認可され「尻屋埼灯台」の建設が決まりました。

設計したのは「日本灯台の父」と呼ばれているイギリス人技師のリチャード・ヘンリー・ブラントン。1873年(明治6年)に着工した灯台の建設は、当時の最先端技術を駆使し、3年4カ月の歳月をかけて完成。1876年(明治9年)10月20日、初点灯を迎えました。

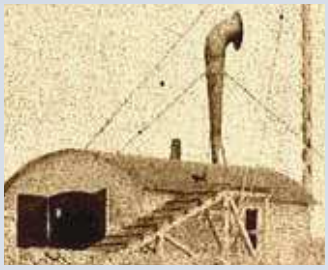
建設当時(明治9年)の尻屋埼灯台(写真提供/公益社団法人燈光会)

「尻屋埼灯台」は、耐震性を考慮した煉瓦による二重構造で、高さ約30m。煉瓦造りとしては日本一の高さとなる、東北初の洋式灯台です。建設に使われた煉瓦は、地元尻屋で焼いたものだと伝えられています。

昭和10年頃の尻屋埼灯台

日本初!電気で点灯する灯台

灯台が完成した翌年には、時計仕掛けの鐘の音で、濃霧時に岬の位置を伝える日本初の「霧鐘(むしょう)」が取り付けられました。2年後には霧鐘を廃止し、日本で初めて蒸気による「霧笛(むてき)」が設置されました。


霧笛(写真提供/公益社団法人燈光会)

そして1901年(明治34年)、灯火を石油から電気に変えて点灯させる、日本初・電気で点灯する灯台となりました。

数々の日本初で歴史に名を刻む「尻屋埼灯台」。1998年(平成10年)には「日本の灯台50選」に選定、2006年(平成18年)には「土木学会選奨土木遺産」、2009年(平成21年)「近代化産業遺産」、2016年(平成28年)「恋する灯台」に認定され、2017年(平成29年)国の「登録有形文化財」となりました。

「土木学会選奨土木遺産」のプレート

経済産業省から認定された「近代化産業遺産」

文化庁の「登録有形文化財」

「尻屋埼灯台」データ

所　在　地/青森県東通村大字尻屋字尻屋崎1-1
点　　灯/1876年(明治9年)10月20日
灯台の高さ/32.8m
光　り　方/単閃白光　毎10秒に1閃光(せんこう)
光　　度/53万カンデラ
光 達 距 離/18.5海里(約34km)
今年度の参観/7月中旬～11月上旬まで
参 観 時 間/9:00～16:00
参観寄付金/中学生以上200円
(灯台のキーホルダーなども販売)
〈問合せ〉燈光会 尻屋埼支所 TEL 0175-47-2889

「尻屋埼灯台」の内部をウオッチング!

東通村役場から尻屋崎までは車で約30分。ゲートをくぐって海沿いを進むと、美しい白亜の灯台が見えてきました。案内してくれたのは、八戸海上保安部 交通課の佐藤幸夫専門官です。

八戸海上保安部の佐藤幸夫専門官

煉瓦造りなのになぜこの灯台は白いのか伺ってみると、煉瓦積みにモルタルを塗って造られているからとのこと。灯台の前には、煉瓦の積み方が実物を使って紹介されていました。

煉瓦造りの二重構造

灯台の内部に入るとすぐ、右側は二重の煉瓦積みでできた頑丈な構造を確認できるスポット!明治時代、この煉瓦をどうやって積み重ねたのだろうと思いを馳せることができます。

螺旋階段をゆっくりのぼると、途中にはのぼった段数が表示されていて、なんだか励まされている気分に。息切れしながら128段をのぼりきると、灯台が光を放つ「灯ろう」部分に到着しました。灯ろうには、灯台を訪れていちばん目をひくレンズがあります。灯台のレンズは、発明者の名前をつけたフレネル式といって、レンズの表面がでこぼこしています。重量のあるレンズはベアリング式の「特殊車輪型回転装置」で回っているそうです。夜暗くなると、自動で点灯するようになっていました。

灯台内部は128段の螺旋階段

扉を開けて灯台上部から外に出ると、春の風と透き通った青い海。晴れた日は、北海道まで見渡すことができるそうです。眼下の芝生にたたずむ親子の寒立馬は、とても小さくかわいらしく見えました。

佐藤専門官は「昨年の灯台150周年を機に、参観灯台として一般公開が始まりました。日本を代表する歴史ある尻屋埼灯台に、ぜひ一度のぼってみてください」と話していました。

白く発光する電球

電球の光を増幅する2等フレネルレンズ

隕石落下?!

1883年(明治16年)10月24日午後8時30分、みぞれ降る夜、尻屋埼灯台に隕石が落下しました。隕石が灯台のガラスを突き破って落下した記録は「官報」に残されており、隕石が落下したことがあるのは、全国で唯一、尻屋埼灯台だけということです。

幻の灯台

尻屋埼灯台は、1945年(昭和20年)に空襲の被害を受け、当時無線通信の作業中だった村尾常人標識技手が殉職しました。

ところが翌年、まだ修復されていない灯台が点灯しているのを、職員が目撃。漁師も灯台の明かりを頼りに上陸できたと感謝したそうです。村人は「村尾さんの霊が船を案じて灯したのではないか」と語り、「幻の灯台」としても知られるようになりました。

漁師の安全を守る地域に欠かせない灯台!

「尻屋埼灯台」のある尻屋沖は、暖流と親潮がぶつかることから海の幸が豊富で、こんぶ、マス、イカ、サケなど、沿岸の漁獲量は村内で最も多い地域です。

曽祖父が灯台守をしていた尻屋漁協の南谷雅人組合長は「昔は漁船が小さかったこともあり座礁する船が多かったが、灯台が出来てからは良くなりました。今でもレーダーなど船の機械が故障したとき、灯台は海の道しるべです」と灯台が漁師の安全に欠かせない存在であると話します。また、尻屋の婦人会では、灯台周辺を定期的に清掃しており、地元が誇る尻屋埼灯台の素晴らしさを、これからも後世に伝えたいと語っていました。

南谷雅人尻屋漁協組合長

東通村を代表する観光地「尻屋埼灯台」

太平洋と津軽海峡、2つの海に突き出た緑の大地に建つ「尻屋埼灯台」は、海の安全を守るのはもちろん、村を代表する観光地です。

東通村経営企画課の宮本憲明商工観光室長は、交流人口を増やすことで、村に元気とうるおいをもたらしたいと意気込んでいます。「観光客の皆さんには灯台を見学したら東通村の美味しいものを食べてもらいたい。また、村の元気の源は、漁業と農業が元気になること。地元食材をふんだんに使うことで生産者の所得向上を目指そうと、村は今、食による観光のまちづくりとして、天然ヒラメをメイン食材とした『東通天然ヒラメ刺身重』に力を注いでいます」と話します。地元の皆さんもぜひ一度灯台にのぼり、尻屋崎の雄大さを感じ、村の素晴らしさを再認識してほしいとも宮本室長は笑顔で話してくれました。

宮本憲明商工観光室長

『しおさい』表紙で感じる東通村の魅力

皆さまから好評をいただいている
広報誌『しおさい』の表紙。
東通村の風景や風物詩をやわらかい
水彩タッチで表現しています。
魅力あふれる地元ならではの四季。
目を閉じると豊かな自然の息吹が
聞こえてきそうです。

発行10回の特別記念号では、創刊号から9号までの表紙を掲載し好評でした。
本記念号では、10号から19号までの表紙を振り返ります。

Vol.10 東通村の門打ち風景

東通村には古くから伝承されている風習が数多くあります。新年を迎え、最初に行われるのが「門打ち」で、熊野権現が甲斐の下りの拍子にのせ、家内安全、豊漁、五穀豊穣を祈祷する儀式です。正月元日から家々を回り歩きます。

Vol.12 早春の野牛川源流

片崎山を源流とする野牛川は、広葉樹林帯からミネラルの豊富な水を集め、清流となり津軽海峡へ注いでいます。春には、雪解けとともに源流一帯に水芭蕉が群生し、薄暗かった沢筋がしばしの間、真っ白なスポットライトを浴びたように明るくなります。

Vol.11 砂丘の日の出（尻労）

東通村の太平洋岸は白い砂丘が遠々と続いています。初夏の爽やかな風に吹かれ、砂浜を散歩すると数種の野草花を見ることができます。ハマナスやハマヒルガオ、ハマエンドウのほか、最近は本当に珍しくなったハマボウフウなどもまれに見ることができます。

Vol.13 野花菖蒲とアズマギクの咲く尻屋崎

本州の果て、尻屋崎の夏はとても短かいですが、その草原には多種多様な花が咲き乱れます。6～7月頃には、ノハナショウブ、アズマギクが一斉に咲き誇ります。そして、一帯には東通村の固有財産、寒立馬の親子が、のんびり暮らしています。

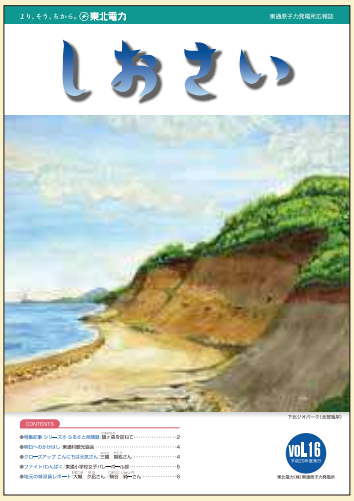
Vol.14 真っ白な花が満開のそば畑

東通村の原風景として知られるのが夏から秋にかけて満開に咲くそばの花の風景です。東通村名産のそばは、味はもちろん美味しく絶品ですが、白い絨毯のようなそばの花一面の景色は、村の至るところで見られ、郷愁を呼び起こしてくれます。

Vol.15 たわわに実ったブルーベリー

5月に真っ白な花を着け、7月下旬頃に実を収穫できるのがブルーベリーです。東通村には、摘み取りができる観光農園が数箇所あります。どこも枝がたわむほどに大きく実り、甘みの強い自慢のブルーベリーで、ジュースやジャムといった加工品も人気です。

Vol.16 下北ジオパーク（北部海岸）

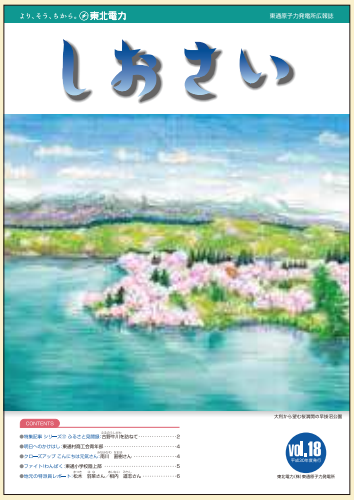


東通村の北部、津軽海峡に面した海岸線では、高さ約20m、長さ約8kmにわたり、約12万年前以前の地層を見ることができます。地層には貝殻などの化石も見られ、今は下北ジオサイトの一つとして多くの観光客も訪れており、広く話題を集めています。

Vol.17 尻労（ソガマ）

東通村の多くの海岸線は砂浜ですが、尻労（しつかり）地区と尻屋地区は岩場の海岸となっています。尻労地区の「ソガマ」は、太平洋に突き出た荒々しい岩々と砂浜がつくりだす風光明媚なところです。時折聞こえるカモメの鳴き声と潮騒（しおさい）の響きが心を癒してくれます。

Vol.18 大利から望む桜満開の早掛沼公園



早掛沼公園は桜の名所として名高い公園です。長く厳しい下北の冬が終わり、春の訪れを告げる桜の開花に、人々は大いに喜び、胸を躍らせます。

公園近くの大利地区からは、満開の桜が沼の水面に映える絶景が望めます。

Vol.19 鹿橋の能舞「かねまき」

数多い能舞の演目の中で、ひときわ特徴的なのが「かねまき」です。あらすじは、女人禁制の寺を詣でようとする娘が、千日の行のすえ、鬼神と化してしまい、その娘を修験者が法力で助け出すという物語です。勇壮で優美な東通村の能舞をぜひ一度ご覧ください。

読者からの声

東通村内全戸訪問対話活動アンケートを通じて、広報誌『しおさい』に対する多くのご意見・ご感想をいただきました。大変ありがとうございました。お寄せいただいた声の中から一部をご紹介いたします。

- ずっと東通村に住んでいますが、他の集落の文化や考え方の違いを知ることができ、とても面白いです。（20代女性）
- 村の子どもたちや伝統行事など、ついつい熟読してしまいます。写真も多く、とても楽しく読んでいます。（30代女性）
- 村で生まれ育っていない私にとって「ふるさと見聞録」は、村内の集落を知るうえでとても役立っています。表紙もいつも素晴らしく大好きです。（60代女性）
- 『しおさい』は、各集落の成り立ちを知ることができ、毎回楽しみです。（80代男性）
- 村内各地には、まだまだ活躍している団体様・個人様やこれから頑張っていこうとしている方もたくさんいらっしゃると思います。そのような方々をとりあげていただけたら嬉しいです。（40代女性）
- 各集落の皆さんが、地域の歴史、神仏や奇習を大切にしていることがよく分かります。（60代男性）
- その土地の意外な面が見え、大変面白く思っています。今後も村内の風物などをとりあげてほしいです。（70代男性）
- 各集落の紹介など、地元の人たちの顔がたくさん載っているのが良いと思います。（60代女性）
- 『しおさい』は小学生の子ども2人も読んでいます。各集落や部活動の紹介記事は、これからも続けてほしいです。（30代女性）
- 「ふるさと見聞録」が、最後一冊の本になることを願っています。（70代男性）

今後も広報誌『しおさい』についてのご意見・ご感想をお待ちしております。

編集後記

『しおさい』20回記念号はいかがでしたでしょうか。

2006年の創刊から、途中、震災の影響で発行回数を減らしたり、紙面の体裁を変えながらも、読者の皆さまに支えられ13年、このたび20号を迎えることができました。本当にありがとうございました。本誌制作にあたり、取材や撮影にご協力いただきました多くの方々にも改めて感謝いたします。

また、昨年実施しました全戸訪問対話活動アンケートでは、本誌に対するご意見やご感想を多数お寄せいただきました。ありがたいことに、その声の多くは、発行の継続や紙面を高く評価いただくもの、今後への期待など編集者冥利に尽きる嬉しいものでした。いただいた声を次回以降の原動力とし、また新たな気持ちで紙面づくりに励みたいと思います。

これからも皆さまにご愛読いただける広報誌であり続けられるよう努めてまいりますので、引き続きの応援をよろしくお願いいたします。

発行
より、そう、ちから。
東北電力 東通原子力発電所
〒039-4293 青森県下北郡東通村大字白糠字前坂下34番4
TEL 0175-46-2225・FAX 0175-46-2227

★誌名『しおさい』について／東通村で絶えることなく聞こえる心地よい波の音（しおさい）のように、皆さまの心に末長く心地よく響き続ける広報誌でありたいという思いを込めています。
★表紙絵「オオセグロカモメ」について／体長は60cmとカモメの仲間では大きく、飛ぶ姿も勇壮で、魚群告知鳥としても親しまれています。村を自生地として周年生活するただ一種の海鳥で、村の鳥に指定されています。